

☆わたしの意見

七〇年を振り返る

最後のカーニバル

大久保文男

△毎日新聞神戸支局長▽



正午、パレード開始を知らせる船の汽笛がいつせいに
ボーツと鳴った。そのとき、雲が垂れこめた空から、ポ
ツリとしずくが落ちてきた。

パレードが始まった。イキな制服の万国博のホステ
ス、振りそでで着飾ったミス神戸たち。みんなぬか雨の
中に行く。パレードが進むに従ってぬか雨は本降りにな
った。

韓国の娘さんたちが振るスーゴン（布）がビショビシ
ヨになって、まるで水まきだ。五月の風にひらめいてこ
そ美しいのに。

「これではあんまり気の毒です。演技をカットしまし
ようか」と若い支局長がいう。しかし婦人会の土井会長
は「それではいままです雨の中で出番を待っている人によ
けいに気の毒です。やらせてあげたい」とおっしゃる。
そのとおりだ。もうやめられない。

「ショボショボ権現、降る長田、生田の祭りは降らん
ことなし」（多少ことは違っても知れない）―その長田
神社が私の氏神。前任支局長の小野君が大まじめで「海
神社に晴天を祈願した方がいいよ」といったのを無視し
て、長田さんばかりおがんだのがいけなかったか。

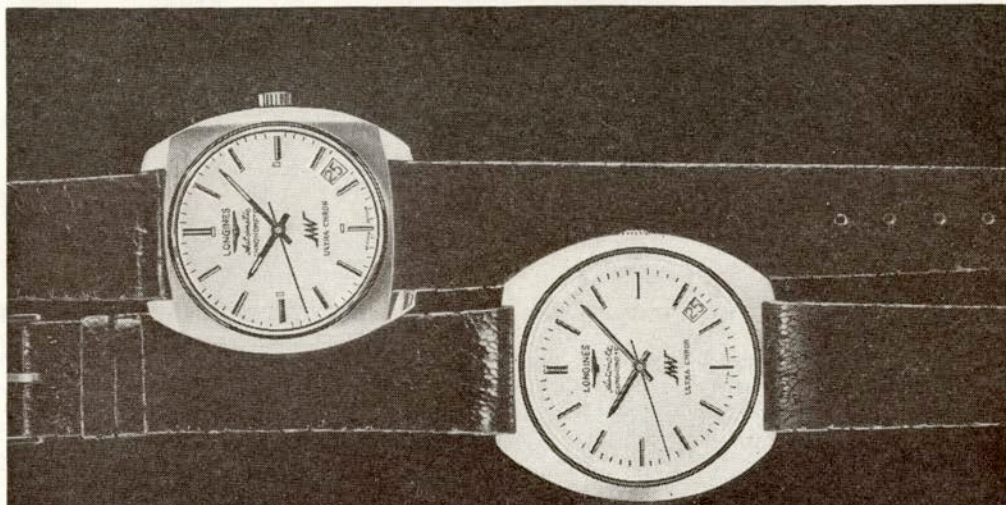
この楽しい神戸カーニバルも、来年から神戸市のみな
との祭りとして一本化する。実のところ二月に着任して小野
君からカーニバルを引継いだとき、とんでもない重荷を
背負わされたと思ったものだ。しかし苦労がみのって、
その楽しさがわかったあとは、もう手離す気はなかった。
神戸市から縁談を持ちかけられ、本社に相談した。

「カーニバルがいつそう盛んになり、市民に愛されるよ
うになるなら、それもよいではないか。もともとそれが
ねらいだったのだから」という返事。

こうしてカーニバルは四回で終った。みなとの祭りも
三十八回で終った。来年から新しい祭りが始まる。

私としては、カーニバルというかわいい娘が、結婚後
もその明るさ、若々しさ、それにちよっぴりオテンバな
ところを失なうことのないよう、見守っていきたい。

LONGINES



ボーナスでロンジン
歳暮・年賀お出かけ姿がひきたちます

ロンジンの時計には、ロンジンに
与えられた数々の栄誉と一世紀に
わたる伝統の技術が結晶していま
す。最も信頼され、最も名声の高
い「ロンジンの時計を持つ誇り」。

そこに価格以上の偉大な価値が秘
められています。

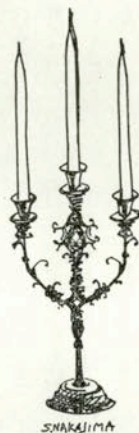
ロンジンの本当のすばらしさは、
当店で実際にお手にとってお確か
めください。



LONGINES

特約店
美甲時計店
元町店・元町三丁目 TEL.33-1798
三宮店・さんちカファンシー・タウン TEL.33-8798

随想三題



カット・中島節子

広場の

おどり

今岡 領子

△今岡領子モダンバレエ研究所主宰▽



日本の太鼓、ゴーゴーのリズム
ミュージックコンクレートを使っ
た創作舞踊、あじさいの花になっ
ておどった子供たち……。その他
その他。会場にも恵まれ、全然違
った環境で、無節操と思えるほど
いろんな系列のおどりを、研究生
一同、大人も子供もおどりまっ
た一九七〇ねん。

その全部に、自分の意志が伝わ
っているのやらないのやら、な

かは踊り手さんまかせの、振付け
という仕事をした私は、またと得
られない貴重な体験をかさね、出
演者は、踊るアホウを通りこした
「キチガイ」ども。文句なしにみ
んな楽しかったと、口を揃えてい
う。子供達は、おどりもさること
ながら、出演の機会が多かったの
で、お化粧が何回もできたこと、
らしい。大人の連中に、「どの舞
台がいちばん印象に残った？」と
聞くと、「お祭り広場で踊ったこ
と」「また踊ってみたい」

△万博まで〇〇時間▽レッス
場の窓からデパートの電光掲示板
を眺めて、「開幕までに出来上が
るのかねエ」無関心だった研究生
たち（私も含めて）。手もちの作
品を踊れるという思いがけない、
いま考えたら全くの幸運な、お祭
り広場への出演がきまっても「え

らい遠いとこまで三日もかよわな
いかんの」と気のりしないこと。
それでもいちおう張切って練習し
公開リハーサルの日、ケタはずれ
の広さに位置あわせではしりまわ
り、音楽にあわせておどりだすと
もうスタンドはいっぱいの人だか
り。拍手をおくってくれるやら、
終って打ち合わせしている出演者
に、ひとめでおのほりさんとわか
るオジイさんのゲキレイ。「ネエ
ちゃんよかったデエ、あんたらホ
ンバカ」「はあホンバよ」とすまし
たもの。（日本の太鼓を伴奏に踊
っている連中に、ホンバかとはど
ういうイミかナーと私はおかしか
ったが）本人たちはゴキゲンで
「こんなにおおせいみでくれるん
やったら、メイクしたらよかつ
た」など若い女のコが十八人も揃
うとうるさいこと。本番では前後
左右どちらをむいても人々々。コ
ンクリートの床をも染めてしま
う強いライトをあびて、おどりもな
んとか無事におわり、盛大な拍手
をあとに退場する頃は「もう四、
五日おどりたいワ」とすっかり自
分達のお祭り気分になってしまっ
たのは、それほどに魅力があった
のか。この時はかりは、「ああ、
おどり手さんはいいナ」と羨まし
い。

舞台と観客席という目にみえな
い壁にさえぎられていたいままで

の舞台から、片ひじはらずにみている各層の観客の中で、星空を仰いで思う存分におどるたのしさを満喫した研究生たちにとってはとなく不評がちだった万博も、パンバクは、よかったね！

本来、おどるたのしさととはこんなものをいうのでしょうか。そこには盆おどりなどの「集い」のおどりのもつよさがありました。

辛苦胆工

アラカルト

いそもとはるあき

△風俗オルガナイザー▽



私はいま、Group 70 の第一回目の活動（十月十日ブリリアントな欧州の巨匠たち）を終えたばかりであり、二回目の活動（十月三十一日アントニオ・ニ・映写会）に向けて、アクセルを踏み込んだところである。今年の五月末に、「すでに死物化してしまっている為政者が与えて来た文化でなく、自分自身の欲望の内奥に根ざした文化」（「表象化された創造行為」の追求）をめざして、まさに「文化不毛」の悪名高い神戸において

Group 70 を、友人からのいろいろな批判の中で結成し、それが出来上がった過程で親友の H くんに声をかけ、半ば強制的に参加させたのであった。

そして Group 70 は、H くんも僕も、映画を三度の飯より好きという事も手伝って、まず自主上映運動から始める事になった。そして漸次、「市民の、市民の手による、市民のための」文化活動をめざして Group 70 は活動を開始したのである。そしてそれからの約一三〇日間にわたる物心両面の労働（？）は、十月十日の予想以上の好評（？）に、一種の安堵感を得ると同時に、何かしら自分の今までの行動が間違っていなかったのではないかと思われた。（この事は、思い上がりかもしれないが……）

だが、それは奇妙な曖昧な表現だが、私の肉体と意識はばらばらになっており、それがうまく（否全然と言った方があてはまっているが……）つながっていない。そしてこれからの Group 70 の活動過程の中で、うまく結びあわず事ができるかどうか自信がない。このような異和感は、今がはじめてではない。ここ一、二年自分が主体的になってグループを結成して以来、今の Group 70 に至るまで、何度となく味わったものであ

る。

おそらくそれは、私がグループを、すでに私のなかに頑としてあるグループを模倣し、それを目指すそうとしたのではなく、存在さえも疑わしい幻想としてのグループを、その不可能な実現に、自らをマゾヒスティックなまでに埋没させようとしているからに他ならない。

出来るうとすれば、自己を否定し、解体しようとするなかに、その精神の軌跡として、私の表現行為かなにかを、自らのグループの中に、投影しているにすぎない。

そして Group 70 は、活動の度の参加者に解放されている。私は参加者が誰でもあるかを知らないし、また知ろうとも思わない。参加者がある一定のものと考え、それに相応して活動を（例会を催す）することは容易であると思う。私はそうした「閉塞的な」グループに興味はない。参加者のもつ視線は無限なまでにアナキーであり、それは私にとって他者との出会い、両者の相互批判、相互理解、自由確認の契機にはかならない。

だが、こうしたグループのありよう、構造は、そこへの参加者にも同じ対応関係をもとめているといえるだろう。

表現行為、創造行為をするとい

う行動のなかで、作り手と受け手が対等の位置関係を取りあえたときに、私の考える、幻想としてのグループがそこにある。

私のこころ、二年の行動は、こうした共同体的幻想に追われるようにして、つまかさねられた僅かな里程標である。そして、私自身へのシビアなまでの自己検証、自己批評として、いま私の前にあればと願っている。

自分自身への挑戦

鶴殿 洋子

△赤坂東急ホテル・花くま店長△



「まあ、よう子ちゃんじゃない？」
ニューヨークのまんまん中――

パークアベニューの、まひるの光の中で、いきなり日本語で声をかけられ、びっくりして立ちどまつた。イラストレーターの川村都がこれもびっくりした顔で立っている。その横にミュージシャンの内田裕也が、いつもの愛嬌深いほほえみをみせて立っていた。東京の私の店をひいきにしてくれている人たちなので、私もつい心が軽く

なった。

「なんでいまごろニューヨークにいるの？」という都女史の質問には、「ちよっと、体を休めに来たのよ」と、調子よく答えておいたのだが、実際はそんなのきな旅ではなかった。わずか一週間というギリギリのスケジュールを組み、熱で重い体を無理に飛行機にのせてアメリカまで飛んできたのは、一つにはアメリカにおける日本料理店の、いわばマーケットリサーチであり、もう一つはある週刊誌の依頼で、ニューヨークで成功したと伝えられる若い日本人たちの、この活躍ぶりを、カメラとペンでレポートしてくるという目的があったからである。さいわいライフ誌のN・Kさんという、よき知人がいたので、仕事は順調にはかどった。アメリカの一人当たりのGNP平均は、ヨーロッパの二倍だという。その活気を目のあたりに見て私は今まではくせんと頭の中に描いていた青写真が、確実に定着していくような気がしてきた。一年前神戸からおよそ西も東も知らなければ、誰ひとり力と頼むコネクションもない、いわば素手で東京のまんまん中の赤坂東急ホテルにしゃぶしゃぶの店「花くま」を開いた時に感じたと同じような、不安と興奮をおぼえたのでした。

神戸にいれば「松の家」という名で通る。しかし東京では「松の家」も「古紋」という名も、何の効力も持っていないかった。それをさとした時、私は母や祖母がたちかっていたものに、頼ることをあきらめた。東京の人たちはムードを求め、味がよくて、サービスがよければ、情や義理にはこだわらない。それを悟るまでに一年かかった。闇の中をめくらめつぼうやみくもにつき進むような形でともかく私は動きまわった。若さだけが武器だった。一年たつたいま、私はやっと光を見出したような気がしている。そこでその光をこんどはニューヨークに見つけようという大きな意欲も、わいてきた。レストラン・ベニハナのロッキー青木氏、ヘアデザイナーの須賀勇介氏、イラストレーターの川村都嬢など、各分野で思いっきり才能を伸ばしている、同世代の人たちの活躍ぶりに刺激されたこともある。その気になって努力すればものごとには必ず報われるのだという信念が、東京で生活してみても、はつきりしたように思う。その気持ち私はニューヨークに持ちこみたいと、いま真剣に考えているところなのである。

自分自身の限界への挑戦――それが結局、生きているということの証(あかし)なのではないだろうか。

堀郁子門下生シャンソン発表会
も、第四回になりました。

神戸に、シャンソンを持って、
私の恩師、菅美沙緒先生が、東京
より来られたのは、昭和三十七年
の寒い冬でした。

それまで、クラシック出身で、
朝日放送専属合唱団の一員であ
り、またその中で選ばれて、ジャ
ズトリオ・ジョリースワングのメ
ンバーとして歌ったり、音楽の分
野では、オペラからジャズまでか

ンです。一年前にやった同じ曲を
今歌うと違っています。心の成長
があるから違うのが当然で、その
ようなことが、日常の生活にも多
いに影響しました。譜面に書かれ
ていない感情の音符を求めて、深
夜街をさまよったり、時間の経つ
のを忘れてレコードに聞きほれた
り、自分の悲しい出来事をかくせ
なくて歌いながら大声で泣き出
したり、叱られたり、笑ったり。
忘れもしない、昭和四十二年早

ある集いその足あと

★ CHANSON GROUP

堀 郁 子



シャンソンをうたう堀郁子さん

なり色々の種類のものになんて
きた私にとって、シャンソンを身
につけるということは、かなり以
前からの念願でもありました。毎
週月曜日には、東京から通って来
て下さった菅先生の情熱と影響
で、一曲一曲たんねんに歌を暖め
たり育てたりして、神戸新聞会館
KCCシャンソン教室で芽生えて
いったのです。

自分の心の成長と共に、その段
階に応じて歌えるものがシャンソ

春に、大阪MBSホールで初のシ
ャンソンリサイタルを仲間と共に
三人で開きました。今まで、暖め
た数ある曲の内より選んで、そし
て、やっとシャンソン歌手として
一人前に認めていただきました。
そしてそれより、菅先生の意志を
ついで、教室を持つようになり、
心のうたを求めて、若い人達も一
人二人と増えてまいりました。

私は、いつも豊かな心で人に接
したいと念願しています。人間は

誰でも孤独なのだから、ふれ合う
心が、何か暖かくつまれた感じ
で、せいいっぱい自分を表現して
楽しく歌える集いであるよう努力
しています。

シャンソンと、一般にいつて、
非常に難解なように思われ勝ちで
すが、確かに、考えようによつて
はむずかしいものだと思います。

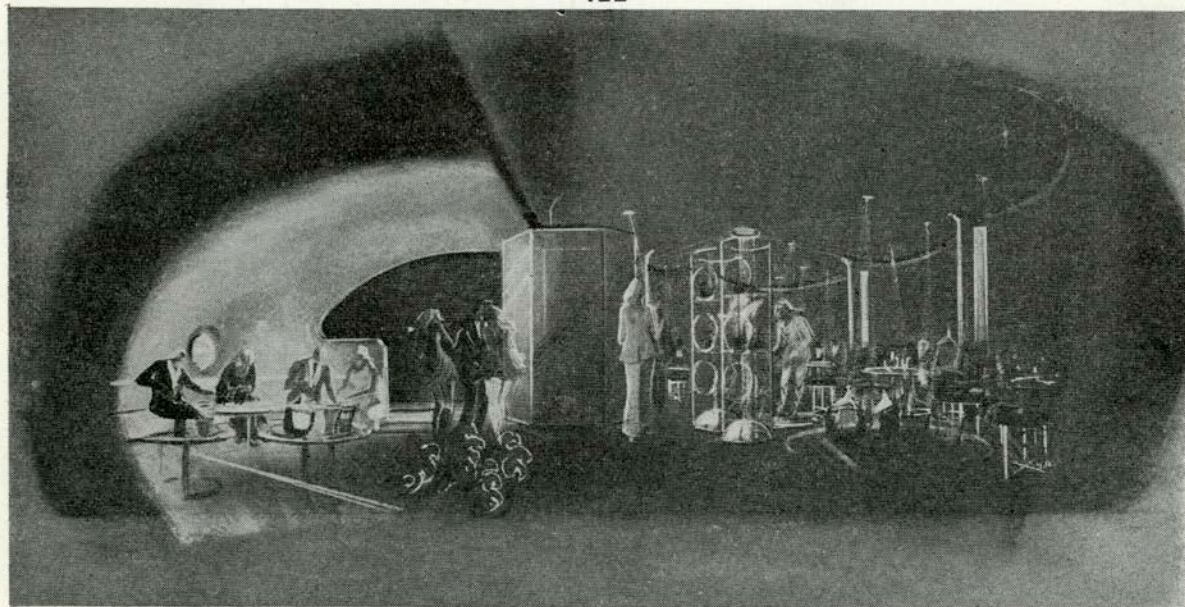
しかし、誰でも、何かするには
努力がいります。歌をうたうにも
生れつきの才能のある人もあれば
好き、というだけの人、美声もあ
れば悪声もあり種々様々です。で
も全て「歌いたい」という気持が
あれば歌えるものではないでしょ
うか。でも、やはり、シャンソン
を歌いたいと思う人は、個性の強
い人が、多いようです。舞台上に立
つと、どうしても表面にその人と
なりがよく現れて来ます。いくら
誰かの真似をしようと思っても、
その人しか出来ない表現が、自然
の内に出てくるもので、これは、
面白いことだと思えます。

神戸で生れ、神戸で育った私は
どこにも行きたくない、神戸でま
だまだ根をおろして、私たちの歌
をもっと沢山の人の手に聞いていた
きたいし、またどんどん仲間を増
やし、若い人達を育てて行きたい
と、心より念願しております。

連絡先★堀郁子

神戸市東灘区籠池通七丁目二の一の五
田中マンション四F 電話0438007

Kobe に大人 向けの 本格的な ディスコテーク open.



神戸市生田区花隈町45

DISCOTHEQUE



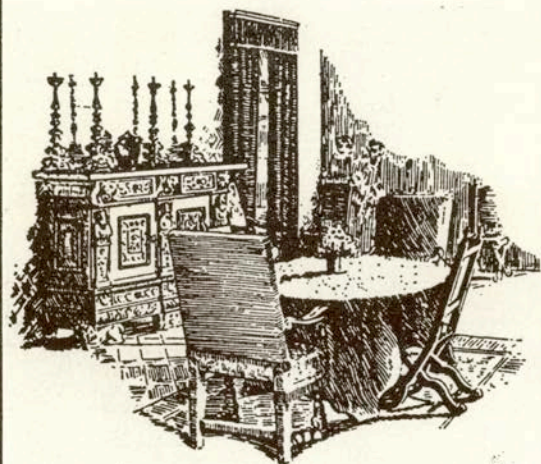
Tel.078 (37)1923

土 / 日 P.M.5.00 ~ A.M.3.00

平常 / P.M.7.00 ~ A.M.3.00

★テーブルチャージ ¥800 ★ビール ¥400 ★サントリオーールド ¥400
 会員 / ¥10,000 ★法人 / ¥20,000
 ★月会費ナシ / 会員はテーブルチャージナシ★

家具・室内装飾・工芸品



永田良介商店

神戸市生田区三宮町3丁目大丸前 TEL 神戸 (39) 3737 (代表)

東京店・東急百貨店 (日本橋店内1階 TEL 03 (211) 0511
本店(渋谷)7階 TEL 03 (462) 3180

工場 神戸市垂水区多聞町小東山 975-35

神戸木工センター TEL (078) 76-5005 (代)

Fachheim's

Merry Christmas



クリスマスおめでとうございます。
ローソクの灯とワインと共においしいユーハイムの
クリスマスケーキを御賞味下さい。

Elise Fachheim

社長 エリーゼ・ユーハイム

ドイツ菓子 ユーハイム

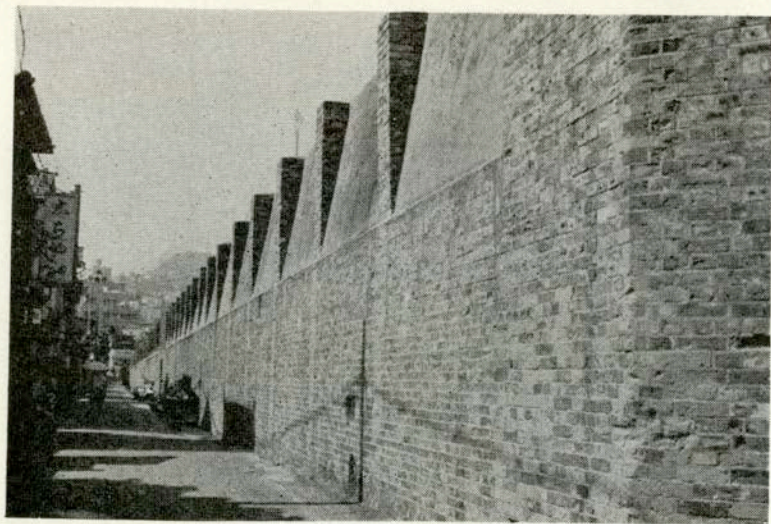
本店	三宮生田神社前 TEL (078) 33-1694
三宮店	三宮大丸前市電筋 TEL (078) 33-2101
さんちか店	三宮地下街スイーツタウン TEL (078) 39-3539

□れんさいずいそう

XIX

平野哀愁

林田 重五郎（随筆家・写真も）



神戸拘留所の長大なレンガ塀は昔のままである

市電平野終点の一つ南に五郎池という停留所があった。その東には、三宮へ移る前の神戸取引所があり、昔はにぎわっていた。ドームの屋根のあるその建物は、今も残っているが、なにに使われているのであろうか。

停留所のすぐ西側に、荒田町三丁目の交番があった。本署はいま消防学校になっている建物で菊水橋署といった。昭和七年から二年間この警察を受持っていたので、夜昼となく、五郎池で下車しては菊水橋まで歩く。そして必ず荒三の交番に立ち寄る。

そのころ、ここには、のち県警本部の教養課長に栄進し、さらに神戸市の秘書課長、経済局長になった、若き日のKさんが、巡査で勤務していた。意気投合して、夜などは流行し始めたばかりの「影を慕いて」を合唱したものである。Kさんは市を退いたあと、新聞社の社長をしてもらったが、惜しいことに亡くなった。昨今のリバイバルで、この歌がテレビから聞こえるたびに、荒三の交番を、そしてなつかしいKさんを思い出す。

◇
それは昭和八年二月二十四日の午後八時すぎのことだった。例によって勤務外の夜を、菊水橋署でだべっていると、「刑務所火事」との交番からの速報、署内は俄然色めきたった。すぐ社へ電話を入れて、同署から百メートルほどの菊水町の刑務所へかけつける。

四方は高いレンガべい。鉄の門へは多数の収容



石段を4、5段上がると門がある平野の住宅

者が押しかけて、「出せ、出せ」と叫んでいる。看守が鉄扉の上に馬乗りになって、ピストルをかざしながら、「さがれ、さがらぬと打つぞ」と叫んでいる。背景はものすごい炎である。殺し三年火事八年という言葉があるほど、新聞記者にとって火事の取材はむずかしい。一年足らぬ新米のわたしは、この光景に全くあがってしまった。

やっと正門の近所で電話を見つけて、社へかけろ。「えらいことですわ、よう燃えてますわ。」それがせいっぱい。電話の相手がきびしい支局長にかわった。「燃えていることはわかってる、落ついて見た通りをしゃべれ。どの辺が燃えているのだ！」やっと見たままを文章にもせずに送る。やがて見事な記事になって号外が神戸の町々に配られた。

刑務所はその後間もなく大久保へ移転した。こんど、あのあとはどう変っているかと三十何年ぶりに訪れて驚いた。一辺二百メートルはあるレンガべいが、当時のまま残っているではないか。名前こそ神戸拘留所とかわっているものの、昔のままである。

拘留所とは犯罪の容疑で逮捕されたものを、刑の確定まで入れておくところのはず。素人が考えてもそんなに多人数ではないと思われる。刑務所時代に比べ、少ない人数のために二百メートル四方、約四万平方メートルという広大な土地と施設が、果して必要なのであろうか。学校なら四校はゆうに建てられる。公園にしてもすばらしいものになるだろう。神戸の町のなかに、こんな広大な国有地をレンガで囲んだまま残しておくことは、



雷の御所には公園ができている

主から直接借りた。奥の間は同様に家主じきじきの借間人で市の電気局に勤めている人が住んでいた。階下は女性と幼女の二人暮らしであったが、家主直接同士なので、食事の世話にもならないし、あまり言葉もかわさなかった。

階下の女性の姿が見えなくなって、しばらくしたある日、新聞を見て驚いた。二十人ほどの密輸団が検挙された記事のなかに、紅一点として写真が出ているのが、なんと階下の婦人ではないか。階上に住みながら、なんにも知らなかったのだから新聞記者としては落第だったかも知れぬ。

湊山町の天王川のほとりで下宿したこともある。湊山温泉が近く、いつも朝プロに行った。親切な家で、フロから帰ると、うまい朝食が用意されていた。湊山温泉はいまどうなっているであろうか。

そのころクリスマスというと、ダンスホールはオールナイトである。ホールが終わって友人たちとダンスーたちを送ってゆくと、天王川の辺で、夜がしらじらと明けて来たことを思い出す。

◇
もったいないような気がする。

平野は以前から住宅地区である。石段を四、五段あがると門があり、せまい庭がつく——長屋であってそのような家が多い。そのころ、平野終点を東へ百メートルほどいったところの、その型の家に間借りをした。間借りといっても、居住者からではなく、家を三分して、二階の表の間を家

◇
久し振りの平野、せまかった平野終点東西の道が広くなってバスが通っている。うまいうなぎ屋はどうなったか。

祥福寺の塔、祇園さん、雪の御所といった町名、清盛の福原町の名残が多く残っていて、神戸のなかの京都文化という平野ではなかるうかなどと考えた。